

5th

ODAWARA DANSEI
ODAWARA DANSEI

Regular Concert

おめでとうございます

小田原男声合唱団 第五回定期演奏会

*手づくりの良さと

ドイツ レンナーハンマ 6角ワイヤー使用

レスターピアノ



小田原男声合唱団 第5回 定期演奏会

— 月 —

1976年6月26日(土) 6:30 P.M

於 / 小田原市民会館大ホール



小田原男声合唱団

代表者 青野正純

男声合唱の危機が囁かれる時代の中で誕生した小田原男声も、メンバーの熱意と周囲の暖い御支援に恵まれ足かけ六年、本日、第五回定期演奏会の日を迎えることができました。合唱団としてこの程度の歴史は、日の浅い部類に入りますが、私達は、職業・地域・年齢など非常に巾の広い人達の集まりなので難かじさ配されましたが、お互いにそれを活かし合い、音楽的に、人間的に成長し、又合唱団も発足当初夢に画いたことを一つ一つ手がけて来ました。この私達にとって、第五回定期演奏会を迎えるということは、一人一人が改めて深い喜びを感じます。こういうことから、今回は今迄の念願であった「オーケストラ伴奏で定演を！」をとりあげ、新星日響の協力を得て、数少ない男声合唱のレクイエム、ロマン豊かなオペラのコーラス、誰もが歌って育った小学唱歌を内容として取り組むことにしました。未熟な点もござりますが、本日は、私達の喜びの気持ちを合せてお聞きとり下さるようお願いいたします。

今日迄の小田原男声を振り返ってみると、①定期演奏会とコンクールを柱とし、日本男声合唱協会に参加の他、共演、賛助出演等巾が広がって来た。②団員の意欲は高く、定着率も又高しいし、新加入者も年々増加している。一方、辞める人を見ると、勤務等の事情の人がその殆んどで、その後も団との交流のある人が多い。③常任指揮の福永先生が真のアマチュア合唱の指導者で、譜読みから演奏までの音楽面だけでなく、運営の面でも、推進力と忍耐力をもって団の基礎の広がり大いに貢献している。一など合唱団としての特徴も出来て来ました。然し、より良い音楽を作るための技術と感覚の勉強、小田原地域の音楽団体との交流を通じての相互研鑽など今後に残された課題もまだまだたくさんあります。十年一昔。今日、本当に内容が充実しているか、合唱団として果すべき役割りを全うしているかを考え、今後の進む方向を見直して福永先生をはじめ私達の合言葉「歌える限り共に歌おう」を実現する為にも、より良い合唱団とするよう努力してゆきたいと考えます。そして又、次々と現れるでしょう男声合唱を愛好する人達の目標になるような、歴史ある合唱団にしたいと念願します。今後共御鞭撻をお願い申し上げます。



小田原男声合唱団常任指揮者

福永陽一郎

東京音楽学校(現芸大)本科ピアノ科出身。井口基成・豊増昇にピアノを、近衛秀麿に作曲・指揮・管弦楽法を、M・グルリットにオペラ指揮法を師事。1956年から9年間藤原歌劇団の常任指揮者をして活躍し、「椿姫」「カルメン」「セビリアの理髪師」「トスカ」「蝶々夫人」等、数多くの公演を指揮している。日本初演の指揮も多く、日本のオペラ界に貢献した業績は、内外に高く評価されている。

合唱音楽への造詣も深く、二期会合唱団、日本合唱協会への出演や、東京放送合唱団とは、演奏会のほか放送も数多い。アマチュア・コーラスに対する理解と情熱も深く小田原男声合唱団以外にも法政大学、同志社大学の常任指揮者であるほか、客演指揮・講師・審査員として合唱音楽向上のため日本各地で精力的に活躍している。同志社大学とはアメリカ公演、法政大学とは昨年のコンクールで金賞を獲得している。

合唱用の編曲も数百曲におよび、東芝レコードなどから数多くのレコードが出版されており、本日のプログラム中の、「子供の四季」もその一つである。また、アマチュアのオーケストラである地元藤沢市の市民交響楽団でも熱心な指導にあたり、毎年定期演奏会、メサイヤ、第九、オペラ等の演奏会を催している。

FIFTH ANNIVERSARY

福永陽一郎

5年目とか10年目とかに一節を感じるのは、人間の如何なる習性なのだろう…?

小田原男声合唱団が、創立から5年目になっているという事実は、まぎれもないことなのだが、そんなを経験したのだという実感が手応えとしてあるわけではない。むしろ、もう5年経ったのか? というのは、月並みな言い方をすると“夢”のようだ。私の合唱指揮生活30年の六分の一が、小田原男声と共にしてきた年月になるのか……。私の感覚では合唱生活は長く古く、小田原男声とのつきあいは短く新鮮である。

真の意味で、生活の中に合唱があるという理想像としての社会人合唱団の確立——おそらく日本で最初——を目標として、手をたずさえてやってきた5年間。とはいうものの、仕事は緒に就いたばかり。今日たゞいま、まだ試行錯誤のまっ最中のような毎日である。

たゞ、今年5周年という掛け声を梃子として、昨年のマンネリズムや迷いというものを吹っ切った活力が湧いてきていると感じるのは、私ばかりではないはずで、“小言親爺”の大久保昭男氏も力がいっているし、創立以来の同志に加えて、この一年間に加入してきた新しいエネルギーは、団内に横溢して、しばしば旧勢力を圧倒するいきおいで存在を示している、たのもしさというか、たのしいことこの上ない上々の雰囲気となっている。小田原男声と音楽をしていると、つい楽天的になりすぎてる自分に、いましめなければ反省はしてみるものの、心が愉快さにはずむのを、とめようがない。

今年、団にとつての大事な時期というより、むしろ、私自身小田原男声との関わりありの上で力を試される年だと考えている。5年目だからといって、調子に乗ってお祭りさわぎをしただけ、などと後ろ指をさされぬよう、年間とおした充実を、みずからに課したいと思っている。

新星日本交響楽団



● 新星日本交響楽団

1969年6月創立。音楽大学卒業者ならびに若い演奏者を対象として、プロ・オーケストラの第一歩を踏み出しました。

若々しい情熱に加えて安定した演奏力を培い、最近では主に、第九、メサイア、フォーレ・レクイエム、モーツァルト・レクイエム戴冠ミサ等、合唱団と数多く協演し好評頂いて居ります。特に昨年2月発足の新星合唱団の発展をみて、7月22日第20回定期では、ヴェルディのレクイエムを準備して居ります。

この度、福永陽一郎先生の指揮で小田原男声合唱団の皆様と協演する機会に恵まれました事は、団員一同慶びに耐えせん。

小田原男声合唱団ヴォイストレーナー

大久保昭男

昭和28年、東京芸術大学音楽学部声楽科を卒業。矢田部勤吉氏に師事。近衛秀麿指揮・青山杉作演出によるオペラ「カルメン」のモラレス役でデビュー。山田耕筰自身の指揮によるオペラ「黒船」、ドヴォルザークのオペラ、「ルサルカ」等にも出演。昭和34年には、ドイツリード、日本歌曲による第1回リサイタルを開き好評を博した。

現在は東京の松原混声合唱団、地元の湘南市民コール、大学では慶応ワグネル、同志社大学グリー、関西学院大学グリークラブのヴォイストレーナーとして精力的に活動している。合唱は心の音楽をモットーに、独自の指導法で団員一人一人の発声を指導、日本の合唱音楽の向上に貢献している。

現在、東京芸術大学講師、昭和音楽短期大学助教授。



“大人の声”と小田原男声

大久保昭男

今年も美しい五月が過ぎ、鮮やかな緑の六月がやってきた。小田原男声にとって大切な音楽会である定期演奏会が五周年を迎え、心からおめでとうと申し上げたい。

私は数多くの合唱団の声を指導しているが、正直に言って、あらゆる意味で一番「大人の声」をもっている集まりである。大人の声をもってはいるのであるが、正直に言ってはいるわけではないところが残念である。そうかと云っていつも残念なわけでは決してない。私が願っているのは、大切なステージでもっともその立派な大人の声を聞かせたいのである。

正しい発声とは、一口に云えば一番楽で美しい声が出る状態をいう。そして色々つけ加えるならば、聞いている人に自然な快さよさをあたえ、広いホールの隅々まで、弱声も強声もおとつて聞こえなければならぬ。しかし、私はいつも心してほしいことは、心のこもった音楽的な声で歌うことが出来る様、日頃より厳しい心構えをもって訓練の積み重ねに努力して頂きたい。

音楽に向っての正しい努力は必ず大きな喜びとなって返ってくることを私は信じている。

第五回定期演奏会を祝して

小田原市長 中井一郎

小田原男声合唱団第五回定期演奏会が、このたび本市市民会館で盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

昭和四十六年十一月に合唱団が結成され、本年で結団五周年目のわずかな歳月ではありますが、創立一年足らずで神奈川県と関東地区のコンクールで優勝され、全日本コンクールには毎年代表として出場。昭和四十八年には銅賞を獲得されるなど、いまや全国にその名を知られる合唱団に成長されましたことは御同慶の至りであります。

さて、音楽は心のふさと、合唱はハーモニーであります。小田原男声合唱団は、よき指導者・福永陽一郎先生をお迎えして合唱経験豊富な団員皆様が一致団結をされ、日頃練習された成果をこの演奏会で発表し、美しい調べを市民の皆様へお聞かせ願いますことを信じてやみません。どうかこの演奏会が成功裡に終ることを期待し、今後の御発展と団員皆様方の御健勝をお祈りして祝辞といたします。

メッセージ

作曲家 多田武彦

第五回定期演奏会おめでとございます。

名指揮者兼名評論家、福永陽一郎先生の指導下、発足以来極めて意欲的に合唱活動を続けてこられた、小田原男声合唱団の活躍振りは本当に目を見張るばかりです。昭和初期、終戦後、に続いて日本では三度目のブームの中で、今度こそ口であだこうだ云うのではなく、本当に地に着いた地道な合唱活動が心から望まれる今日此頃です。そうした環境の中で、円熟した福永先生の指揮と酸いも甘いもよくわきまえたメンバーのかたがたが作り出す大人の演奏は、今年もまた一まわり大きい年輪となって、この合唱団の新しい基礎をつくって行くことでしょう。

演奏会のご成功と小田原男声合唱団の益々のご繁栄を心からおいのり申し上げます。

福永先生と小田原男声・ケルビーニ

日本合唱指揮者協会副理事長、
湘南市民コーラス常任指揮者

晋

関屋

「私は関屋さんの先生ということになっているんですねー」ある日突然福永先生からこういわれて、私は経歴詐称で訴えられたようにあわてた。雑誌社その他からの「わが師」とか「指導を受けた先生」とかの問合せ欄には必ず福永先生と書いていたから、そんなものを見られてのことらしい。何しろ先生とは年令は二才しか違わないし、最近まで大学合唱団の新入部員から大学何年生かと尋ねられて答えに困ったという方だから、私みたいな奴た奴から先生呼ばわりされるのは、あまりお好きでなかったのかもしれない。また先生の先生——一寸ややこしいが——である近衛秀麿先生が、「指揮なんてものは教えられるものではない」とおっしゃったとかで、私なんかも教えていただいたというより、月謝も払っていないのだから、正確に言えば、福永先生の音楽や指導法を一生懸命盗ませていただいたというべきかもしれない。いわば勝手思い(片思い?)の図々しい弟子であるが、わが師は福永先生であると思っっている。

福永先生から指導を受けている合唱団は、日本全国非常に数多いが、そんな中で小田原男声合唱団は、誕生の時から先生の息がかかっている数少ない幸せな合唱団である。創立の年にスケールの大きな音楽と精密なアンサンブルで、合唱コンクール全国大会にいきなり飛び出すという離れ業をやったのけ、最近コンクールではあまり聴けなくなった男声合唱のすばらしさを再認識させてくれたのは、われわれ男声合唱で育ったものにとって大変嬉しいことだ。

その小田原男声ケルビーニの「レクイエム」を演奏されるという。大分昔になるが、先生からこの「レクイエム」のスコアをお土産にいただいたことがある。こういう楽譜の珍しい時だったから、勿論私は大喜びだったが、探していたものがやっと見つかったといった先生の、嬉しそうなお顔が忘れられない。そして、私達はあの美しい音楽を歌う喜びを味わった。今度は小田原男声の番です。より感動的な「レクイエム」になると大いに期待しております。

若く、そして熟した親友達へ

東海メールクワイアー

都築義高

小田原男声、我々の親友達はもう5周年を迎えた。そのゆるぎなき前進に心から拍手を送る。全国コンクールでブル一のブレザーでさっそうと「晋香天子」を歌い、デビューした時を思い出す。もう誕生の時から、小田原男声は、立派な獅子であった。全国的な男声合唱団の集まり、日本男声合唱協会(JAMCA)で親しくおつき合いくつあったが、正に男声合唱に対する熱意はすごいもので、これまた男声合唱の鬼・福永陽一郎氏の指導のもとにあっては5年にしてすでに、その真隨をきわめつつあるのは当然のことである。なんととっても正統的な取り組みが徹底しているのが最大の特長で、レポートリリーを見ていると溜息が出る程の極め付きばかり。

今夜の曲目は男声合唱を愛する者の夢の実現です。がんばって下さい。益々の御発展を祈ります。

I Deuxième Messe de Requiem pour Voix d'Hommes
avec Accompagnement à grand Orchestre.

..... Luigi Cherubini

- Introitus et Kyrie
- Sanctus
- Graduale
- Pie Jesu
- Dies irae
- Agnus Dei
- Offertorio

休

憩

II “子供の四季”

〈男声合唱とオーケストラのためのメドレー〉

..... 福永陽一郎 編曲

- 春の小川
- 村祭り
- 茶つみ
- 里の秋
- 牧場の朝
- 冬の夜
- 夏は来ぬ
- かぞえうた
- 海
- 吹雪の晩
- 赤とんぼ
- 仰げば尊し

III オペラ合唱曲集

1. 狩人の合唱 魔弾の射手より.....F・ウェーバー
2. 巡礼の合唱 タンホイザーより.....R・ワグナー
3. 兵士の合唱 ファウストより.....C・グノー

Deuxième Messe de Requiem pour Voix d'Hommes avec Accompagnement à grand Orchestre.

Luigi Cherubini

大編成オーケストラを伴う男声合唱のための第二鎮魂ミサ曲

ルイジ・ケルビーニ

作曲家：ケルビーニ

Maria Luigi Carlo Zenobio Salvatore Cherubini は1760年にフィレンツェで生まれ1842年、パリで死去した作曲家である。モーツァルトより4年おそく生まれ、ベートーヴェンより10年はやく生まれた人ということになる。そうして、ベートーヴェンが死んで、ということとは、音楽の世紀がすつかりロマン派の時代にはいつてから15年も生きていた人で、晩年に定住していたパリでのことを言うと、ショパンと同時代人とも言えるし、当時、世界楽壇の中心地であったパリでは、ロッシニとマイヤーベアとケルビーニが三大・大御所であった。世界的にいうと、ナポレオンのヨーロッパ覇を中にした前後の時代を生きた人である。

ケルビーニは、12人の子供たちの10人目として生まれた。父は、フィレンツェのベルゴラ歌劇場のマエストロ・アル・チンパロ＝指揮者で、ケルビーニはこの父から6才頃すでに音楽の手ほどきを受けはじめ、9才のときには作曲をはじめていた。16才までに、大規模な教会音楽を作曲するまでに成長していたが、18才の折、トスカーナ大公レオポルド2世(神聖ローマ帝国皇帝・マリア・テレジアの次男)のお声がかかりポロニーヤにおもむき、当時のイタリア宗教音楽の巨匠、ジュゼッペ・サルティの門下生となった。のちにミラノ大寺院の楽長になったサルティのもとで、ケルビーニは、必要とされて、イタリア・オペラ ― 当時は誰も彼も彼も、モーツァルトでさえイタリア語の台本でオペラを書いたことを想起すべきである ― の若き作曲家として、たちまち有名になった。ヘンデルがまだ存命中であるイギリスで、王室作曲家として、皇太子やクインズベリー公から大切にされていたにもかかわらず、ルイ十六世の皇后、マリー・アントワネットの招きに応じ、1786年にはパリに移り、皇后のお声がかかりたちまちパリ上流社会の寵児となったケルビーニは、パリにイタリア歌劇場を設立し、同時に「オルフェ」の作曲家クリストフ・グルックの伝統を継承して、フランス・オペラの創造を目指すようになる。

今様にいうと「ベルサイユのバラ」の時代で、フランスは大革命に突入してゆき、マリー・アントワネットは断頭台の露と消え、王党派と見られたケルビーニはパリを脱出しノルマンディに逃避する。1794年7月、ロバスピエールの失脚後、情勢の安定を待つてパリに帰り、1795年にはパリ音楽院の設立に参画して教授に任命された。ケルビーニの成功したオペラとしては、「アウリードのイフィジェニア」「メデア」「ホルトガルの宿屋」「担水夫」「アナクレオン」「ファニスカ」などという題名が知られているが、現今、復活上演されているものは、1953年にフィレンツェでマリア・カラスによって蘇演された「メデア」のみであり、愛国的音楽家であったトスカニーニが「レクイエムハ短調」や「交響曲ニ長調」の上演に熱心であったほかは、ケルビーニの栄光は長く眠りについたのである。

「メデア」は、カラスがうたわなくなった後も上演を重ねており、ようやくケルビーニ・リヴァイヴァも定着してきており、ベートーヴェンをして『私にとって現存の最大の作曲家』と言わしめた真意が、すこしづつ理解されはじめてきた。「男声合唱のためのレクイエム・ハ短調」は今日、世界の男声合唱界のレパトリーとして中心的存在にさえなりつつある。

ケルビーニは、ナポレオンとの不和で失脚したが、1814年のナポレオンの退位ののち再帰し、ルイ18世の命令で、「ルイ16世のためのレクイエム・ハ短調」を作曲したりして、もっぱら教会音楽の大家としてパリに君臨し1821年にパリ音楽院の院長となつて、1841年、高令(81才)のため辞任するまでその地位にあった。次の年の3月15日、死去した。

レクイエム・ハ短調

ケルビーニは、オペラの作曲家として大家であったばかりでなく、教会音楽においても、当時のフランスで大権威であった。ケルビーニのことを19世紀のパレストリーナとよび呼び方は一般化している。しかし、彼の多数の教会音楽の中でも、このハ短調の第2レクイエムは特異な存在である。ケルビーニは、自分の葬式のためにこの鎮魂ミサ曲を作曲したのであった。その動機は、1834年、歌劇「バグダッドの太守」や「白衣の婦人」の作曲家、フランソワ・ポアエルデューの死去によって惹起された。すなわち、ポアエルデューの葬儀の際、ケルビーニの、1917年の作である「ルイ16世のためのレクイエム・ハ短調」(混声合唱と管弦楽のための)が演奏されたのであるが、当時のフランスの教会やパリ大司教は、教会内で女性が行うことに對して否定的意向を持っていて、多少のいざこざがあった。ケルビーニは、彼自身の葬儀のとき、同じもめごとが起こらないように、習慣に従った男声三部合唱を使用した新しいレクイエムの作曲にとりかかったのである。1836年に全曲が完成し、1838年3月25日にソシエテ・デ・コンセル (パリ音楽院の演奏組織。旧・パリ音楽院管弦楽団 ― レコードがたぐさんある ― のフル・ネームは『オルケストラ・デ・ソシエテ・デ・コンセル・デュ・コンセルヴァトワール・ド・パリ』であった) で初演された。当初の計画どおり、1842年、ケルビーニが死去したときに、その葬儀でも演奏されたことは言うまでもないことである。

内容的には、この「男声合唱のためのレクイエム・ハ短調」は、1950年2月にトスカニーニによってリヴァイヴァされた「混声合唱のためのレクイエム・ハ短調」と、多分に似かよったところが持っている。両曲とも、ヴァイオリンとヴィオラを省略した低音域弦楽合奏で開始されること、また通常の演奏用レクイエムでは省略される「昇階唱」と「ピエ・イエズ」がふくまれていて、変化をもたらすと同時に、広い音域の豊かな響きを生み出している。全体は、カトリック教会の「死者のためのミサ」― Missa pro Defunctis ― の典礼に従って作曲されている。芸術的に完成度の高いレクイエムを作曲した有名な人には、モーツァルト、ベルリオーズ、ヴェルディ、フォーレなどがあげられる。

今夜の演奏に使用される楽譜は、シュレジンガーの初版を基礎にして、ケルビーニ自身による写本(パリ音楽院図書館所有)を参照しながらルドルフ・リュックが校訂し、フランクフルトのC.F.Peters社が出版した新版である。(演奏時間：約50分)

私とケルビーニーのレクイエム…

私が、ケルビーニーの作品に二短調のレクイエムがあることを知ったのは、昭和28年の秋である。同志社大学の図書館の楽譜のカタログ・カードに「男声合唱のためのレクイエム・二短調」ケルビーニー作曲というのがあるのを発見した。同志社グリークラブの中興の祖・森本芳雄氏が亡くなられて、その蔵書が大学図書館に寄贈されており、その中にあったのである。しかし、うかつなことに私は、それが、その何年か前にトスカカニーニによって華々しくリヴァイヴァールされた「混声合唱のためのレクイエム・八短調」の男声版編曲くらしいにしか思わなかつた。八短調で書かれた混声合唱曲を男声合唱用の編曲するとき、二短調に移すことは、ごく常識的な手法であった。トスカニーニのレコー

TEL 03 2270 0840

TEL 03 2270 0840